



大槻ケンヂさん

1966年2月6日東京都中野区野方に生まれる。1982年にロックバンド「筋肉少女帯」を結成し、翌年レコードデビュー。1991年には初の著書を発行し、音楽活動と平行して文筆活動を開始する。以後、バンドのボーカル、作詞家、小説家、エッセイストと幅広く活動し、現在に至っている。

子ども時代の思い出は、高円寺とともに

中野区の野方生まれなんです。高円寺までは大体2キロくらいで、散歩にちょうどいい距離なんですね。それで子どもの時から、父親に連れられてよく行ってましたね。それが高円寺との出会いかな。阿波踊りも子どもの頃に、近所の人たちと一緒に北口に陣取りして見物した思い出があります。その頃は、今ほど人気のあるイベントではなかったので、気軽に見物できましたね。高校の同級生なんか踊っていたこともあって、阿波踊りは子どもの頃からずっと身近にある高円寺を強く感じさせてくれるイベントなんです。最近は、すっかりメジャーになって見物自体が難しくなっていますが、それでもあの雰囲気大好きで、毎年足を運んでいます。夏の終わりに、遠くまで阿波踊りの音楽が聞こえてくると心が誘われますね。

中学生になって本が好きになり、高円寺の古書店めぐりをしているうちに阿佐谷にも足をのばすようになりました。中央線の高架下を自転車で駆け抜けるんですが、当時の高架下は薄暗くてヒッピー風の人歩いたり、大人の雰囲気がして子供心に怖かったのを覚えています。想像力がかきたてられる空間でしたね。

最愛の町、高円寺

高円寺は、お金がないけれど夢のある若者がたくさん住んでいて、パワー・トゥー・ザ・ピープルに満ちた活気ある町ですね。最近は古着屋が増えたりと様変わりはしていますが、自由で庶民的な気風は以前のまなのうれしい。遊べる場所がたくさんあって、様々なイベントで活性化もしているし。何よりサブカルチャー的な空間の隣に、日常生活が存在しているのが魅力です。まさに「住んでなんぼのサブカルシティー」なんです。高円寺は質

屋が多くて、春になると質流れの楽器やCDが店頭に並ぶんです。高円寺を出た人の遺産ですね。見るたびに、若者の夢と挫折を思いしじみしてしまいます。売れたかったら中央線を脱出しろという言葉があるんですが、僕はやっぱり高円寺を中心とした中央線が好きですね。空気が身体にしみついていると言うか。離れにくいです。



高円寺との絆を大切に

高円寺フェスには、ライブハウスの知人に誘われたのがきっかけで、2009年より毎年、座・高円寺で「オーケンのスーパーのほほん学校」という、映像、おしゃべり、演奏のライブショーで参加しています。自分で撮影した、面白い場所や気になる場所の写真なんかも披露して、高円寺の裏情報いっぱいイベントになっています。それから、高円寺は小説や歌の舞台としても登場させています。自分のよく知っている場所を、作品に親しんでくれる人に伝えたい、という思いがありますね。作品世界にリアリティーも出ますし。高円寺に暮らす、心中すらできない若いカップルを描いた「高円寺心中」という歌があるんですが、発表の数年後に、歌に登場するような

カップルから「大槻さん、僕たち今、高円寺心中真っ最中です」と、明るい調子で声をかけられた時は、びっくりしましたね。でも、この気さくさが高円寺ですよ。



今後も高円寺とともに
現在は、「筋肉少女帯」「特撮」等のバンド活動が仕事の中心になっています。小説の執筆は2006年に高円寺を舞台にした「縫製人間ヌイグルマー」を発表後は休止状態です。小説ってハイリスク・

ノーリターン的なところがあるんですよ。苦労しても報われないことも多いしね(笑)。でも、80年代の高円寺を舞台にした男女の話を、いつか書いてみたいです。

音楽活動では、ギターを練習して、高円寺、阿佐谷界限の小さなライブハウスで弾き語りをするのが夢ですね。今後も、高円寺を中心とした中央線沿線に軸足を置いた活動を続けたいです。



取材を終えて

大槻さんというと、バンド活動時の奇抜なメーキャップ姿が思い浮かぶのだが、素顔は、高円寺界限を普通に歩いているような雰囲気の方。穏やかな口調に、パンクロッカーの面影を探るのは難しい。けれど話が進むにつれ、大槻さんの言葉は、穏やかな中に高円寺への熱い思いを運び始める。身体の中には、掛値なしの高円寺っ子の血が流れているに違いない。この熱さに、パンクロッカー・大槻ケンヂさんを強く感じた。

—取材・執筆：村田理恵（掲載・2011年12月22日）—